平成25年 3 月25日

郷土あれこれ

第24号

発行　あきる野市教育委員会　東京都あきる野市二宮350　電話 042-558-1111　FAX 042-558-1560

あきる野市の石造物

佐　野　泰　道
（伊奈石の会・多摩石仏の会会員）

あきる野市では平成14年度に秋留地区、平成21年度に多西地区、22年度旧五日市地区、23年度に補足調査と、四ヶ年に渡って市内の石造物の悉皆（しっかい）調査を行い、『あきる野市の石造物』としてまとめ、報告しました。旧五日市町地区の石造物については、すでに石井道郎先生が「郷土あれこれ」（五日市郷土館発行）の第15号から18号にすばらしい紹介文を書かれています。したがってここに紹介する石造物は出来るだけ重複を避けて、旧秋川市を中心にあきる野市の石造物の注目すべき点を４点だけに絞って報告しようと思います。

（１） 寒念仏塔について

寒念仏というのは寒の入りから立春までの30日間、夜の寒さの中、念仏を唱えながら村の中を一巡したり、お堂に集まって念仏を唱えたりするものです。本来は僧侶の修行の一つだったものが民間にも現当二世（現世と死後の世界）の幸福をもたらす行いとして広まったものです。

あきる野市は江戸時代・明治時代を通じて寒念仏の盛んなところで、元禄11年（1698）から、大正７年（1918）までの寒念仏塔が73基残っています。私が確認した範囲では、あきる野市よりずっと広い土地を持つ青梅市ですら25基、八王子市では12基に過ぎません。また、寒念仏を行う村人たちの集まりである寒念仏講中の活動が極めて活発で、神社に灯篭や手洗石（ちょうずいし）を寄進したり、交通の安全を願って馬頭観音を立てたり、庚申待を行って庚申塔を建てたりしています。73基のうち32基（40％強）がそのような寒念仏講中によって建てられた馬頭観音や庚申塔や灯篭などです。厳寒の中を30日間も修行と言ってもよいような行をやり通すほどの人たちですから、村の生活のさまざまな場面で、力を発揮したのでしょう。

市内在銘最古の寒念仏塔、山田瑞雲寺元禄11年（1698）

市内で最も新しい寒念仏塔、折立、大正７年（1918）

瀬戸岡村寒念仏講中によって建てられた庚申供養塔、宝暦13年（1763）瀬戸岡・朱陽院参道横

（2）馬頭観音について

馬頭観音は128基確認されましたが、そのうち99基が旧五日市町地区のもので、二つの地域での違いを最も顕著に表しています。これは旧五日市町地区のような山村と、旧秋川市地区のような平地の村との生活様式の違いによるのでしょうか。

馬頭観音は馬が秣（まぐさ）をむさぼり食うように、私たちの無知や欲望や罪の原因である煩悩を食い尽くしてくれる仏様として信仰された変化観音の一つです。観音様は衆生（すべての生きとし生けるもの）が現に生きており、死後生まれ変わる地獄・餓鬼・畜生・修羅・人界・天界の六つの世界（六道）に、六種の観音（六観音―聖・千手・馬頭・十一面・准提または不空羂索・如意輪）として姿を現し、その世界の衆生を救い導くと言われます。その中の畜生道を担当したのが馬頭観音で、頭の上に馬頭を頂いているのが特徴です。本来の馬頭観音は私たちの煩悩（心の中の悪魔）を退治する仏なので、恐い顔をしています。そしてその力の大きさを表すために、顔を三つ持っていたり、手も６本や８本あり、斧や剣などの武器を持った姿で表わされたりします。五日市・開光院の１面６手の坐像は憤怒相（ふんぬそう）で本来の馬頭観音の姿を最もよく表していると思います。

市内在銘最古
宝暦14年（1764）
１面６手坐像
五日市・開光院

菅生・路傍、３面６手立像
造立年不明

私たちがよく目にする馬頭観音は、１面２手立像の温和で慈愛に満ちたお顔をしています。それは、馬頭観音が頭の上に馬頭を頂くところからそう呼ばれ、その信仰が庶民の中に広まるときに馬の守り神・交通安全の守り神として信仰されるようになったためです。

表１　形態別・造立主別時代推移

	刻像塔			文字塔			合計
	講・村	個人	不明	講・村	個人	不明	
1741～1770	1	1	3	0	0	0	5
1771～1800	4	1	3	0	0	0	8
1801～1830	7	4	8	4	1	1	25
1831～1860	1	4	3	9	9	2	28
1861～1890	0	0	0	2	3	5	10
1891～	0	2	0	6	16	1	25
小　計	13	12	17	21	29	9	101
年不明	0	1	21	0	2	3	27
合　計	13	13	38	21	31	12	128

表１は128基の馬頭観音を刻像塔と文字塔、講中や村中によって建てられたものと個人によって造立されたものとに分け、30年毎の時期区分で推移を見たものです。市内においても全国的な傾向である「刻像塔から文字塔へ」「講・村による造塔から個人による造塔へ」の推移の特徴をはっきりと見て取ることができます。

市内最後の講中による造塔は五日市・玉林寺上の地蔵堂前の文字塔ですが、ここには96人もの寄附者名が刻まれ、五日市と周辺の人々の生活に馬がいかに大きな役割を果たしていたかがわかります。と同時に寄付者の中に３件の自動車会社の名があり、馬による交通の時代が終わりを迎えつつあることを物語っています。昭和９年（1934）に権田坂に建てられ、昭和60年に現在地に移築されました。

五日市地蔵堂前の文字馬頭観音

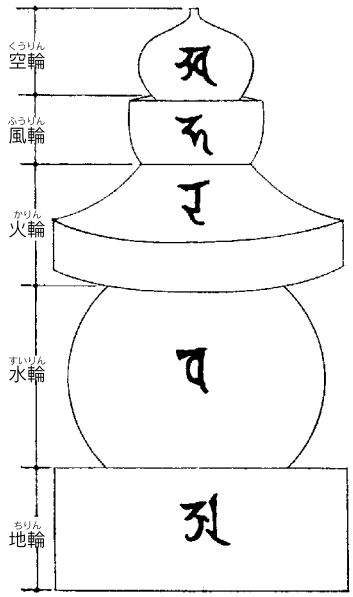
また、１面２手の立像が圧倒的に多い中、市内には１面２手の坐像が２基有ります。１面２手坐像は多摩地区では私の知る限りでは、隣の日の出町に１基、桧原村に１基、青梅市ですら１基を数えるのみです。舘谷の正光寺と森山の岸野家の２基です。特に後者は珍しい憤怒相で、貴重なものです。

草花・森山の１面２手坐像の馬頭観音（拓本採取中）
造立年不明、憤怒相、明王馬口印を結ぶ

（３）五輪地蔵について

五輪地蔵というのは地蔵菩薩の一形態ですが、地蔵の背後に五輪塔（註）が刻まれているので、五輪地蔵と呼んでいます。

油平・福徳寺の五輪六地蔵の一体



五輪塔模式図

（註）五輪塔はインドの五大思想（すべてのものは空・風・火・水・地の五大要素からできているという考え）を形に表したもので、宇宙・万物を象徴したものです。真言宗では大日如来＝宇宙・万物とするので、五輪塔は大日如来をあらわしていると考えます。

五輪地蔵は和歌山県の高野山を発祥の地とし、全国的に分布していますが、その数は極めて少なく、今のところ高知県に数基、栃木県に１基、江戸川区に１基、残りの10基はすべて多摩地区です。しかもその10基の所在地を見ると、

横沢・大悲願寺（新義真言宗）……３基
大悲願寺の末寺……３基
本末関係にはないが、大悲願寺と交流のあった新義真言宗の寺……２基
大悲願寺と交流のあった近隣の臨済宗の寺……２基

となっています。大悲願寺との深い関係が推察されます。造立年を見ると大悲願寺の墓地入口にある寛延元年（1748）塔が最も古いということがわかります。この五輪地蔵は、大悲願寺24世の如環が若くして亡くなった愛弟子菊渕房玉幢のために建てたもので、如環は過去帳に「この玉堂の墓石は高野山奥

横沢・大悲願寺の五輪地蔵
（菊渕房塔）

ノ院の汗流地蔵尊を模写したものだ」と記しています。多摩地区の10基の五輪地蔵は大悲願寺の影響下で作られたものと考えてよいでしょう。その意味で五輪地蔵はあきる野市を特徴づける石仏と言えるでしょう。

また、油平・福徳寺の五輪地蔵は他の五輪地蔵と違う特徴を持っています。他の五輪地蔵が舟形光背といって、舟の形をした光背を持ち、その中に五輪塔が浮彫りされているのに対して、この福徳寺の五輪地蔵は舟形光背ではなく、板状の五輪塔を光背としています。しかも単体の地蔵ではなく六地蔵です。きわめて稀少、貴重な石仏です。

油平・福徳寺の五輪光背六地蔵、安永７年（1778）

（４） その他の注目すべき石仏あれこれ

あきる野市内には以上のほかにも、板碑、庚申塔、順拝塔、道標、灯篭などの奉納物、顕彰碑など、たくさん見るべきものがありますが、近世の石仏５基を紹介して結びとさせていただきます。

①菅生の大聖院

大日如来坐像。人々の幸せと平和な世の中の到来を願って、人々の罪を代わりに背負ってこの地で即身成仏した大聖院の墓塔。宝永３年（1706）建立。

②瀬戸岡・朱陽院の弁才天

頭の上に鳥居とヘビをいただく弁才天の坐像。もともとはインドの川の神様。水と豊饒の神様で、日本の水と豊饒の神であるヘビ信仰と習合。巳待供養の本尊として祀られました。

①菅生・大聖院

②瀬戸岡・朱陽院・弁才天
享保12年（1727）

③小川・地蔵堂の鬼子母神

人間の子供をさらって食べるインドの鬼神。お釈迦様に教え諭されて子どもの守り神となりました。天保10年（1839）。

③小川・地蔵堂の鬼子母神

④小川・慈眼寺の閻魔大王

④小川・慈眼寺の閻魔大王

おなじみの閻魔さまですが、石造物としての閻魔像は極めて少なく、西多摩ではこの像が唯一です。

⑤代継・白滝神社の倶利迦羅不動

不動明王のシンボルである剣を飲み込もうとする竜。白滝神社の横を流れる湧水の守り神（水神）として祀られています。

⑤代継・白滝神社の倶利迦羅不動